発行　令和２年９月４日

三原市久井歴史民俗資料館　vol.4

モーモー通信

えっへん！

モーモー館長

懐かしモ～！昔のあかり

秋の夜長に…あかりは欠かせませんね。資料館に展示している，ちょっと昔の照明器具をご紹介します。

火を使うことが文明の第一歩でした。縄文・弥生時代の竪穴式住居の中央には，「炉」が作られており，食べ物の煮炊きだけではなく，あかりの役割もありました。それから電気が使われるようになるまで，昔の人はあかりに工夫をこらしていました。

久井地域に電気がついたのは大正７（1918）年で，市街地のみでした。久井全域に電気がついたのは，昭和 10（1935）年です。

【行灯】

ろうそくや油脂が光のもとになっている灯火具です。使われ始めたのは，室町時代で，かつてはもち運び用でしたが，江戸時代に置いて使われるようになりました。日本家屋はすきまが多いので，消えやすく不便なため，灯台に紙の覆いをつけたものが使われ，形も角形と丸形に分けられます。

【がんどう】

現在の懐中電灯のようなもので，桶型の底に持ち手をつけ内側にろうそくを立てて照らしました。どこに向けても，常にろうそくは上に向き，伏せて置いても空気穴があるため，ろうそくの火は消えません。持ち主を照らさないので，強盗や強盗探しにも使用され，「強盗」の字が当てられることもありました。

【提　灯】

時代劇でみたかも

古くは「挑灯」と書き，竹製の籠に紙を貼っていましたが，その後竹ひごをらせん状に巻いて骨とし，紙や絹を貼って口輪と底輪をつけた伸縮自在の折りたたみ式になりました。

【カンテラ】

江戸時代末期から使用された，鉄や真鍮の注ぎ口をもつ，ランプ以前の油用灯火具です。菜種油などの植物性油を入れて口から綿をだし灯を灯しました。

明治時代になって石油用が普及しました。

【石油ランプ】

石油を金属製，またはガラスの油つぼに入入れて使用する灯火具です。油を吸った芯に火をつけ，ガラス製のほやで火が消えないように風から守ります。

明治初期は高価でしたが，ろうそくより石油の方が安く，菜種油やろうそくを使ったあかりよりも明るいため，明治中期には普及し，生活に変化をもたらしました。

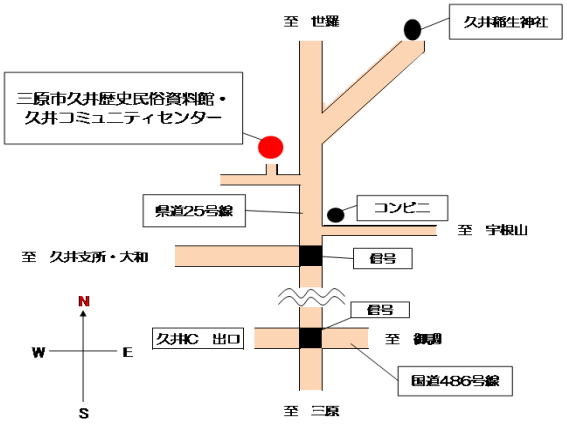
★モーモーマンガ★
「しりとり」

解説シートNo.１「久井地域歴史年表」を発行しました。歴史について，モ～っと学んでみませんか♪

つづきは資料館で…

〒722-1303
三原市久井町下津 1397
三原市久井歴史民俗資料館
TEL・FAX　0847-32-7139

休館日　月曜日（月曜日が祝日の場合，翌日休館），年末年始

アクセス　中国バス久井中停留所下車

ごあんない図